

注(2)参照)、同年九月、朝鮮国を辞した(世祖三年九月甲戌の条)が、天順三年正月に朝鮮国に対し、さきにうけた書契と礼物を対馬島で奪われたむね訴えてきた(世祖五年正月癸巳の条)。朝鮮国は対馬島主を叱責した(同年正月戊戌の条)が、対馬側はこれを事実無根と回答し(同年八月乙丑の条)、朝鮮側もこれを了解した(同年八月壬申の条)。道安がこれ以降、朝鮮国に使用した記録はない。天順元年(一四五七)と本文書の成化三年(一四六七)との時間的ひらきは大きい、諸経緯を経て、道安が礼物を琉球国へ納付した可能性がある。金剛経 金剛般若(波羅蜜)経、一卷。一切の存在の空、無我を説き、禅宗で重んじられる。水野弘元他編『仏典解題事典』春秋社、一九七七年。なおこの他の仏典の解題は、この著ならびに『仏書解説大辞典』大東文化社 昭和十年、東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』国書刊行会 一九八二年、による。

(5) 起信論 大乘起信論。理論と実践の両面から大乘仏教の中心的思想をまとめたもので、仏教史上きわめて重要な書物といわれる。

(6) 円覚経 不詳。あるいは円覚経(三九〇六)注(13)の誤りか。

(7) 四教儀 天台四教儀。高麗の僧諦観の著。天台教学の入門書として中国でも広く流布した。

(8) 心経 般若(波羅蜜多)心経。

(9) 翻訳名義 翻訳名義大集。九世紀にチベットで編集された基本訳語集。

(10) 画鼓 仏具としての太鼓にはさまさまあるが、打面に絵を画くものには、大形の火焰太鼓の他に、直径三、四十センチの、手に持って用いる懺法太鼓があり(『仏具大辞典』鎌倉新書、昭和五七年)、後者を指すか。

(11) 小鐘 喚鐘ともいい、形は梵鐘に似るが、小型で仏殿に懸けておく(有賀要延編『仏教法具図鑑』国書刊行会、平成五年)。

(12) 鉦鏡 鈴に似たかね。舌が無く、寛やかな孔に半ばさしこまれた柄で音を発する。鉦ははさみ、ちようつがいの意。なお鏡にはこの他に、銅鏡と呼ばれる鉦(シンバル状で二つ打ち合わせて使用する)と同様のものがある。

(13) 油茱 厚手の油紙。

(14) 番 枚。紙を数える数詞。

(15) 正布 麻布。

1-39-06

朝鮮国王李瑑より琉球国王あて、返礼の書簡と別幅

(一四六七、八、一九)

朝鮮国王李瑑、琉球国王殿下に奉復す。

細かに惟うに、貴邦、自来世々、聘問を修め、寡人の継緒に逮び、特に信使を遣わして以て旧好を講ぐ。第だ海路叟かに阻むに因り、久しく酬謝を曠しくす。今又、遠く書問を辱しくし、益々信義を敦くし、感愧交々并さる。既う所の鸚鵡・孔雀は頃来价の偶々語るに因り、之酒ち異域に求めて送り至れるを知る。兼ねるに書籍・

酒等の物を寄せらるれば、益々厚意に感ず。不腆の土宜は具に別幅に在り。領納せよ。余冀わくは自玉し永好ならんことを。

成化三年（一四六七）八月十九日

朝鮮国王李（瑛）

別幅

綿布一万匹 綿紬二千匹

紅細苧布一十匹 白細苧布四十匹

黒細麻布四十匹 白細綿紬三十匹

人参一百五十斤 虎皮一十張

皮豹一十張 滿花席一十五張

滿花方席一十五張

鞍子二面

豹皮心獺皮辺鹿皮裏座子二事

厚紙一十卷 冊紙一百卷

油紙一十五張 屏風一座

篋子二対 石灯蓋四事

油煙墨一百丁

紫石硯一十面 朱紅匣、錫硯滴、具す

黄毛有心筆一百枝

黄毛無心筆一百枝

白摺扇二百把 青玉短珠一串

刀子四把 毛鞭一十把

松子六百斤 燒酒三十瓶

清蜜三十斗 蠟燭一百枝

法華經二部 大悲心經二部

永嘉集二部 成道記二部

四教儀二部 円覺經二部

翻訳名義二部 楞伽經疏二部

阿弥陀經疏二部 維摩經宗要二部

觀無量壽經義記二部

道德經二部 金剛經五家解二部

楞嚴義海二部 法数二部

涵虚堂員覺經二部

金剛經治父宗鏡二部

楞嚴会解二部 高峯和尚禪要二部

真実珠集二部 楞伽經二部

碧巖録二部 水陸文二部

維摩詰經二部 法鏡論二部

真草千字文二部 証道歌二部

心經二部 紫芝歌二部

八景詩二部 浣花流水詩二部

東西銘二部 赤壁賦二部

趙學士蘭亭記二部

王羲之蘭亭記二部

注*本文書は、『李朝実録』世祖十三年(成化三)七月丙子の条ほかの

記事により、琉球国王が僧同照・東渾等を遣わして、鸚鵡・大鶏・胡椒・犀角・書籍・沈香・天竺酒等を献じたのに対する返書であることがわかる。『李朝実録』には本文書の礼物のみ記載がある。

(1) 継緒に：信使を遣わし 継緒はあとを受け継ぐ。ここでは王位の継承。世祖元年(一四五五)には琉球国王の使の道安が錫・蘇木を献じ、漂流人を送還した(世祖元年八月戊辰の条)。これ以降も『李朝実録』には世祖三年・四年・五年・七年と遣使がみられる。

(2) 自玉 自愛すること。

(3) 別幅 ここに記される礼物については、『李朝実録』世祖十三年八月庚戌の条に記載がある。しかし実録には別幅の冒頭にある綿布一万匹と綿紬二千匹の記載がなく、他にも多少の差異がある。又、この莫大な礼物については、朝鮮国内で反対があった(『李朝実録』世祖十三年八月己亥の条)。

(4) 満花方席 花模様を織りこんだ座布団。

(3) 座子 敷物。

(6) 簇子 掛軸。

(7) 青玉短珠一串 青石(鋼玉石の一種で青色)の短い数珠か。串は貫いて糸に通したものの数詞。

(8) 刀子 一種の装身具で粧刀ともいう。柄と鞘は竹・木・角・金銀・玳瑁・琥珀などで作り、彫刻をほどこし、絹のより糸で房をつける。優れた工芸品として、日本や中国に輸出するほか、使臣の贈品に用いられた(田川孝三『李朝貢納制の研究』東洋文庫、昭和三十九年、五六二頁)。

(9) 法華經 妙法蓮華經。天台宗・日蓮宗などの根本經典。なお

これ以下の仏典の解題は(三九一〇五)注(4)の文献による。

(10) 大悲心經 (仏説千手千眼觀世音菩薩広大圓滿無碍) 大悲心(大)陀羅尼經か。大非心陀羅尼經は千手陀羅尼とも呼び、千手觀音の功德を説く。密教や禅宗で誦誦される。

(11) 永嘉集 永嘉禪集。唐の永嘉玄覺(？―七一三年)の禅に関する文を弟子が編集したもの。

(12) 成道記 不詳。釈尊の成道について記したものか。

(13) 円覚經 大方広円覚修多羅了義經。北インドの仏陀多羅の訳と伝えるが、中国で選述された偽經ではないかといわれている。宋代以降の仏教に大きな影響を与え、特に禅宗で重んじられた。

(14) 楞伽經疏 楞伽經(後注(27)参照)の注釈書。三国新羅時代の著作で、現存しない。

(15) 阿弥陀經疏 阿弥陀經は浄土三部經の一つ。中国・日本に広く流布し、誦誦經典の随一にあげられる。阿弥陀經疏には、新羅善徳王代の僧慈藏の著で新羅における浄土信仰の起源となったものの他、統一新羅時代に元曉・円測などが撰じたものがあるが、いずれも現存しない(鎌田茂雄『朝鮮仏教史』東京大学出版会、一九八七年)。

(16) 維摩經宗要 新羅の元曉の著、一卷。維摩經(後注(30)参照)の要点を述べたもの。

(17) 觀無量壽經義記 隋の慧遠(五三三―五九二年)の著、一卷。觀無量壽經(浄土三部經の一つ)の注釈書。

(18) 道德經 『老子』の別称。

- (19) 金剛經五家解 金剛經(三九〇五)注(4)参照)についての傳大士の贊、六祖の口訳、圭峯の纂要、冶父の頌、宗鏡の提綱をいう。
- (20) 楞嚴義海 楞嚴經義海(首楞嚴經義海)三十卷、宋の咸輝の著。
- (21) 法数 教理が定型化されて、数によってまとめられたもの。四諦・六度・十二因縁など、数を帯びて解説された教義。明の一如の『大明三藏法数』などは法数を集めた編著(中村元『仏教語大辞典』東京書籍、昭和五十年)で、その類の書物であろう。
- (22) 涵虚堂員覚經 『李朝実録』には涵虚堂円覚經とある。涵虚堂は朝鮮の曹溪宗の己和(二三七六—一四三三年)の寺の小室の名。己和の著に『円覚經疏』があり、このことであろう。前掲鎌田著二一五頁。
- (23) 金剛經冶父宗鏡 前注(19)のうちの冶父の頌、宗鏡の提綱か。
- (24) 楞嚴會解^{エダ} 楞嚴經會解(大仏頂首楞嚴經會解)二十卷、元の惟則の著。
- (25) 高峯和尚禪要 高峯原妙禪師禪要、一卷。宋の原妙の語を編んだもの。
- (26) 真実珠集 禪書の一つとして『仏書解説大辞典』に名がある。
- (27) 楞伽經 インド大乘仏教思想の代表的經典。禪宗で尊重する。
- (28) 碧巖録 仏果圓悟禪師碧巖録。十卷。宋の仏果圓悟(一〇六一—一三五年)が雪竇重顯(九八〇—一〇五二年)の選んだ公案百則の頌に解説や批評を加えたもの。禪宗、特に臨済宗で重んじられる。
- (29) 水陸文 水陸儀文。餓鬼道に落ちた亡者や無縁の亡者の靈に飲食を供する水陸会(施餓鬼会)の儀礼を記したものの。
- (30) 維摩詰経 維摩詰所説経。漢訳の維摩経は三種あり、そのうち鳩摩羅什訳をいう。空の思想を説く初期大乘經典。
- (31) 法鏡論 統一前後の新羅の僧懷興の著といわれる。現存しない。
- (32) 真草千字文 真書(楷書)と草書の千字文。千字文は梁の周興嗣(?—五二一年)撰。四言古詩二百五十句一千字から成り、初学者の教本、習字の手本とされた。
- (33) 証道歌 永嘉真覚禪師証道歌。永嘉玄覚(前注(11)参照)が禪の悟りを古詩体で歌唱したもの。禪の神髄が流麗な文体で記されているため広く誦誦された。
- (34) 赤壁賦 宋の蘇軾(一〇三六—一一〇一年)が友人と赤壁に舟遊して詠んだ賦。前後二編ある。
- (35) 趙学士蘭亭記 趙学士は趙子昂(一二五四—一三二二年)。元の文人。趙子昂の書による蘭亭記の拓本であろう。『李朝実録』では「趙学士所書石本」と「蘭亭記」とが別々に記されている。
- (36) 王羲之蘭亭記 王羲之(三〇七?—三六五年?)。晋代の書家の書。蘭亭記(蘭亭集序)は晋の時、当代の名士四十一人が会稽山陰の蘭亭に会して詩を詠み、王羲之がその序を記したもの。原本はないが種々の模本があり、行書の手本とされる。